

## 広島市まんが図書館における来館者調査 —マンガを「図書館」で扱うとはどういうことなのか—

伊藤 遊 ITO Yu

村田麻里子 MURATA Mariko

山中千恵 YAMANAKA Che

谷川竜一 TANIGAWA Ryuichi

### 1. はじめに

近年、マンガをテーマにした文化施設が増えている。全国に50～60館あると言われているこうした施設だが、そこでのマンガの扱われ方は、実は、様々である。例えば、「マンガ＝美術作品としての原画」とみなされている場合には「マンガ美術館」が構想されるし、史料としてマンガ関連資料が扱われる場合には「マンガ博物館」が、“郷土の偉人”としてのマンガ家に焦点があてられる場合は「マンガ（家）記念館」が想定される。あるいはまた、ほとんどのマンガ作品は「書籍」の形態で発表されるため、こうした施設が構想される際はしばしば、「マンガ図書館」がイメージされてもきた。今回は、この「図書館」として論じられるマンガ関連文化施設について考えてみたい<sup>1</sup>。

そもそも、マンガ本のみを収集することを目的とするマンガ専門図書館は決して多くはなく、すでに存在する一般図書館のコレクションの一部としてマンガが加えられるというパターンがほとんどである。2000年代以降、「マンガ研究」の盛り上がりを受け、こうした学術研究に資する資料としてのマンガ本の整備が意識されるようになった。京都国際マンガミュージアムの開館（2006年）や国際児童文学館の閉館問題（2008年）、米沢嘉博記念図書館の開館（2009年）といったことを受けて、例えば、『現代の図書館』192号[日本図書館協会 現代の図書館編集委員会 2009]では、マンガ研究資料としてのマンガ本のアーカイブの必要性に関する議論がなされている。

しかしながら、これまで、マンガを図書館で扱うことに関する議論は、もっぱら教育的な観点において行われてきた[伊藤 2006]。そこでは、『みんなの図書館』269号[図書館問題研究会（編）1999]における〈特集 図書館で漫画を提供するには〉のように、マンガ本をどのよう

な観点から購入するのかといった議論や、どのように開架にするのかといった議論が中心となっている。一方、マンガ図書館を訪れる来館者が施設をどのように利用してきたかという実態に関しては、ほとんど言及されてこなかった。来館者に関する議論はしばしば、貸出冊数や、来館者数という数字のみに還元されており、そこでの来館者の経験や動機が問題とされることはほとんどない。

本稿では、マンガ図書館の成功事例として注目を集めてきた広島市まんが図書館を取り上げ、館内における来館者の行動に注目した実態調査をもとに、マンガ本を図書館で扱うとはどういうことなのかについて考えてみたい。

## 2. 広島市まんが図書館の沿革

広島市まんが図書館（以下、「まんが図書館」）[写真1・2] は、広島市南区にある標高約70mの比治山頂上付近にある。「漫画及び漫画に関する資料を体系的に収集・保存するとともに、各種行事を開催することによって、漫画文化の発展に寄与する」ことを「特色」に掲げる[広島市の図書館 2011 年度版：p.79]、公立のマンガ図書館である。

1979年、広島市が政令指定都市移行したことを記念し、比治山が芸術の森として市民文化の中心になるように企図される。1980年には現代美術館などを中心にした比治山芸術公園基本計画が策定され、1983年、その計画の一環として、まんが図書館の前身である「広島市比治山公園青空図書館」が開館する。この時点ではマンガを専門とする図書館ではない。しかし、利用が芳しくなかったため、市議会において「漫画などを置いて身近な楽しい青空図書館にしてはどうか」という提案を受けた[久留井 1998：p.784]。こうした提案もあって、この青空図書館が、1997年に改装され、開館したのが、広島市まんが図書館である [久留井 1998]。

所蔵資料は、2011年3月31日時点で、99,488冊となっている[広島市の図書館 2011 年度版]。マンガ評論書やマンガ研究書、マンガの描き方指南書も一部あるが、ほとんどは、マンガ作品



写真1 広島市まんが図書館外観



写真2 まんが図書館館内

表 1

| 入館者数／延床面積(人／㎡) |       |
|----------------|-------|
| あさ閲覧室          | 538.9 |
| 安佐南区図書館        | 406.9 |
| まんが図書館         | 368.8 |
| 西区図書館          | 299.0 |
| 中区図書館          | 278.8 |

2010 年度における広島市の図書館の単位床面積あたりの来館者人数。[広島市の図書館 2011 年度版]をもとに作成

を収めたマンガ単行本・マンガ雑誌である。新聞数紙と一般雑誌数誌も置かれている。館職員によると、もともとは3万冊を所蔵する図書館として構想されていたにもかかわらず、現状はその3倍を所蔵しており、このことが、館を運営する上で大きな課題となっている。

公立図書館ということもあり、入館料や利用料は必要ない。もちろん、マンガ本などは、借りることが可能だ。手続きをすることで、一時的に館外に持ち出し、比治山公園などで緑

陰読書をすることもできるようになっている。

2010 年度のまんが図書館の貸し出し冊数は、453,709 冊である<sup>2</sup>。また、来館者数は毎年 23～24 万人ほどで推移しており、増加・減少の傾向は見られない。2010 年度は 241,959 人であった[広島市の図書館 2011 年度版]。広島市内の他図書館との来館者数の比較してみると、広島市まんが図書館の単位床面積あたりの来館者人数は 369 人／㎡で、広島市内の公共図書館 13 館中 3 位につけている(2010 年度)[表 1]<sup>3</sup>。こうした数字から、広島市まんが図書館は、市民サービスという点で「成功」しているとみなされている。実際、マンガ関連文化施設を構想するにあたって、多くの関係者が、同図書館を視察している。

### 3. 来館者調査の概要

広島市まんが図書館がいかなるコンセプトのもとに運営されているのか、その結果、来館者がその空間をいかに受容しているのかということを考えるために、われわれは、同館において実地調査を行った。具体的には、来館者が館内にどれくらいの時間滞在し、実際に何をして過ごしているのか把握することを目的に、滞在時間調査および、館全体を対象にしたトラッキング(tracking)調査を行った。また、館の運営コンセプトや現状を知るために、スタッフへのインタビューも行った。

トラッキングとは、来館者の動線を把握する事を目的としておこなわれる追跡調査のことである。博物館における来館者調査の伝統的な方法論の一つで、図書館で行われることはほとんどないが、他のマンガ関連文化施設におけるわれわれの調査で既に、この手法を採用してきたため、比較可能性を確保するという目的もあって、今回この方法を採用した。対象となる空間の図面をおこし、調査員が、来館者がたどった経路を手で書き込んでいく。どこで留まったか、どこに視線を向けたかなども記号で書き込み、それ以外にも気が付いたことをメモする<sup>4</sup>。

今回のトラッキング調査は、京都国際マンガミュージアムと宝塚市立手塚治虫記念館での調

査枠組を引き継ぎ、館全体を対象としたものである。調査枠組村田・山中・谷川・伊藤の4名の共同研究として行われ、館の全面的な協力を得た。また広島市内の大学生、大学院生を調査員として募集し、事前説明を2011年9月6日(火)に行わない、翌7日(水)～11日(日)の5日間で本調査を行った。調査期間として平日と休日の双方を調査日に含め、各日調査員3組(計

表2 トラッキング調査および滞在時間調査の結果

|  | トラッキング調査結果          | 滞在時間調査結果          |
|--|---------------------|-------------------|
| 調査期間   | 2011年9月7日(水)～11日(日) | 2011年9月9日(金)      |
| 採取トラッキングデータ  | 71件(うちロスト2件※)       | 220件              |
| 対象性別(男/女)  | 41/30               | 138/82            |
| C/T/Y/A/S ※※   | 9件/3件/24件/27件/8件    | 9件/9件/81件/73件/48件 |
| 平均滞在時間(ロスト物件は抜く※)  | 44分                 | 58分               |
| 最長滞在時間   | 4時間56分(60才くらい男性)    | 4時間44分(60代以上男性)   |
| 最短滞在時間   | 0分(30代男性)           | 2分(40～50代男性)      |
| ※ ロストとは、トラッキング中に調査対象を見失ってしまったケース。<br>※※ (C)小学生以下、(T)中高生、(Y)20～30代、(A)40～50代、(S)60代以上 |                     |                   |

表3 年齢別のトラッキング調査および滞在時間調査の結果

| 世代        | トラッキング調査者分布 |    |    | 9月9日全来館者 |     |    |
|-----------|-------------|----|----|----------|-----|----|
|           | 世代分布        | 男性 | 女性 | 世代分布     | 男性  | 女性 |
| 小学生以下(C)  | 9           | 5  | 4  | 9        | 4   | 5  |
| 中高生(T)    | 3           | 2  | 1  | 9        | 4   | 5  |
| 20～30代(Y) | 24          | 12 | 12 | 81       | 46  | 35 |
| 40～50代(A) | 27          | 14 | 13 | 73       | 40  | 33 |
| 60代以上(S)  | 8           | 8  | 0  | 48       | 44  | 4  |
| 合計        | 71          | 41 | 30 | 220      | 138 | 82 |

ロスト2件のぞく 単位(人)

6名)がデータを収集した。なお調査においては基本的にサンプリングは行っていない。

9月9日(金)には来館者の滞在時間調査を実施した。この調査は、全ての来館者の性別(男/女)と年齢層(小学生以下/中高生/青年20～30代/壮年40～50代/老年60代以上)を目視で判断し、それぞれの入館時間と退館時間を記録するものである。

トラッキング調査と滞在時間調査から得たデータ総数、性別、年齢および滞在時間の分布結果は[表2・3]および[グラフ]の通りである。これらにおける、トラッキング調査の結果と全来館者を対



グラフ トラッキング調査対象者および滞在時間調査対象者の滞在時間分布

象とした滞在時間調査の結果の比較から、今回のトラッキング調査結果が、同館における一般的な来館者のデータであると考えられることができる。来館者の主な特徴としては、滞在時間が比較的短いこと、青年層および壮年層が中心を占めていることが分かった。平均滞在時間、最長滞在時間および最短滞在時間に関しては [表2] の通りである。

#### 4. 空間利用と来館者の特徴

まんが図書館の建物は平面が扇型の2階建てで、2階に主階が置かれ、1階は事務室となっている。2階は、壁沿いも含め、大部分のスペースに書棚が設けられ、残りの空間に、貸出・返却カウンターや新聞ラック、検索機等が配置されている。マンガ本の開架冊数および訪れる来館者数に比して空間がかなり狭く [表1]、床は、書棚に収まりきらなくなったマンガ本の入った段ボールが多数並んでいるという状態である。2階の東西両端にはそれぞれ読書スペースが設けられているほか、中央部に7～8人が座れる円形のソファがある。また、本棚の傍や柱の下にもイスが置かれており、狭い空間の中でも最大限座って読めるように配慮されている。両端の読書スペースには、それぞれ展示用の什器が設けられており、貴重書や、テーマをもって集められたマンガ本が紹介されている。

では、こうした空間は実際どのように利用されているのだろうか。来館者は館内でどのような行動をしているのだろうか。

まず特徴的なことは、館内の人口密度が均一ではないということだ。東西両側に設けられた比較的ゆったりと利用できるはずの読書スペースがあまり活用されていない一方、狭い空間がさらに狭く利用されているのである。特に西側の読書スペースは館内の一番奥に位置する最も落ち着ける空間であり、また大きな机とそれを囲むイスという図書館らしいしつらえが用意されているにもかかわらず、このスペースに足を踏み入れた来館者は、トラッキングデータ62件のうちのわずか5件で、そのうちイスに腰を落ち着けるという行動は3件しかみられなかった。この3件は、いずれも1人で来館している50代から60代の男性のケースである。来館早々、躊躇なくその場所に向かい、腰を落ち着け、そこを基点に、マンガを探しに行っては戻ってくる。そうした行動から、彼らにとってそこが「定位置」として認識されていることがわかる。このスペースのすぐわきにある什器には、古いマンガ雑誌など貴重な資料が「展示」されているが、ここを見る人は調査中誰もいなかった。

東端にある「ふれあいルーム」は、ガラスで仕切られており、より独立性の高い読書スペースである [写真3]。ここにはマンガ単行本や雑誌が置いてあるものの、大きな机とイスが配置されており、座って本を読む空間として位置づけられている。1年に数回はイベントスパー

スとしても使われる。また、ガラス什器が置かれ、簡単なマンガ展示も行われている。調査期間中にこの「ふれあいルーム」に来館者が入ったケースは11件であった。この11件の年齢層と性別は様々だが、ここでも、机とイスに腰を落ち着けたのは50代～70代の男性である。新聞ラックに近いこともあり、マンガではなく新聞を持ち込んで読む人もみられた。新聞や雑誌だけ読んでいく人もいれば、新聞・雑誌とマンガを交互に読む人もいた。この部屋に入ってきた年齢の若い人々は、部屋の奥に位置するマンガ雑誌の本棚を目当てにしており、書棚の前で立ったまま読むか、部屋から持ち出して読むかのどちらかであった。また、この11件のうち、同室にあるガラス什器の展示を見た人は皆無であった。



写真3 東端の読書スペースの様子

以上のように、2階の両端に設けられた読書スペースは、人口密度も低く、交通量も少ない場所であり、その利用者は、比較的長い時間を過ごす中高年の男性に偏っている（すなわち年齢層やジェンダーに偏りがある）。また、「展示」は、まんが図書館がアーカイブ機能やマンガに関する情報発信機能を持っていることを示すために狭い空間の中で“死守”されている機能だと思われるが（後述のスタッフインタビュー参照）、調査中、来館者がそうした展示をみることはほとんどなかった。

人口密度も低く、交通量も少ないこの東西両端の読書スペースに挟まれたその他の空間は、様々な意味で両端の読書スペースとは対照的に機能している。

2階のちょうど中央辺りに位置する丸型のソファは、（両端の読書スペースが男性ばかりなのと対照的に）主に成人女性が利用する傾向がある。そのソファ近くの本棚には、「ハーレクインコミックス」シリーズ<sup>5</sup>が並んでおり、さらに周辺には成人女性向けのマンガ雑誌がそろっていることが、そうしたジェンダー偏重の原因の一つと考えられる。この棚とソファを往復するケースが複数観察され、ひとつの行動パターンになっている。

また、扇型建物の内側（南側）の方の壁沿いには、複数のイスが並べられ、書棚からはみ出たマンガ本の入った段ボールが床に置かれているため、全体的に人口が密集する空間になっている。イスとイスの間の距離も、イスと本棚との距離も近く、もはや通行人一人通るのがギリギリという息が詰まるような空間だが、そこに滞留する来館者は、そのことをかまう気配がまったくにないように見える。マンガを読むことで、周辺からの情報をいっさい遮断し、自分の周りにプライベート空間を構築しているかのようである。

館内全体を、くまなくかつ同じ場所を何度も回遊する来館者が一定数存在することも、同図書館の人口密度が高いようにみせている理由の一つだろう。調査の結果、少なくとも10件のケースで、調査対象者は何度も同じ場所を通り、かつ本棚の並ぶ中央部を全体的に回遊したため、図に動線が描き込めないほどだった [図3・5]。彼らはマンガを手にとって中身をざっと確認し、読むか読まないか、あるいは借りるか借りないかを決め、次の本棚へ行くという動きをする傾向があり、滞在時間もそれなりに長い。10件のうち最短の滞在時間でも28分、最長は756分にも及んだ。10件の平均時間は126分、特殊に長い最長の756分のケースを抜いた9件でも、平均56分の滞在時間である。彼らは、同図書館を、借りるためのマンガ本を「読む」場所というよりも、借りるためのマンガ本を「探す」場所とみなしているように見える。

また、全来館者の平均滞在時間は44分だが、時間別の来館者数分布を見ると、滞在時間が短いほど多くなり、全体の53%が30分未満の滞在を示した [グラフ]。これは、多くの来館者が、館内でマンガ本を読むことだけを目的にしているというより、貸出・返却という目的をもって訪れている結果だと考えられる<sup>6</sup>。

来館者の多くは、本棚付近で立ったままマンガを読み続ける、イスと本棚を往復する、本棚を移動しながら適宜立ち止まって読むなど、本棚を基点とする動きをみせ、先述のような東西両端にある読書スペースで腰を落ち着けて読むということは稀である。本棚とイスが隣接している部分が混み合う理由はここにあるが、一方で、館としてはイスにきちんと腰掛けて（マンガ）本を読むことを期待している。しかし実際には上記のような行動が多く、とりわけ子どもたちのマンガを読む身体や姿勢に関しては、様々な例が報告されている。たとえば、マンガ本を床に置いて座り込んで読み、館のスタッフに注意されている瞬間や、マンガを壁に押しつけて、足を大股に広げて壁に向かって読んでいる姿などである。いくつかのマンガ文化施設において2009年から行っているわれわれの来館者調査からも、マンガが「ごろごろ寝ころがって読む身体」を誘発する特徴があることははっきりしているが、図書館という空間においては、床に座り込んだり、部屋の隅に寝転がってマンガを読んだりすることは、基本的に許されない。そのような子どもがいたら注意する、と館スタッフもはっきり語っていた。また館内にはノートを広げて調べ物をするための専用スペースを設ける空間的余裕もなく、受験勉強も禁止されている。

こうした空間事情が帰着するのは、マンガ本を「借りて帰るか／留まって読むか」という限定的な選択肢である。こうした実態をもとに、来館者の行動を、館内でマンガ本を「読むか／読まないか」、「借りて帰るか／借りて帰らないか」、という二つの軸を設定して来館者を分類してみると [図1] のようになる。図に従って、順に説明していこう。

今回の調査において、来館者の行動として最も多かったのは、「(IV) 読まない・借りる」と

いうパターンで、71件中27件だった。[図2]のケースにわかりやすくみられるように、滞在時間が非常に短く、単に返却する、あるいは予約システムを利用して借りる本を受け取ることが主たる来館目的となっているようなパターンである。同じく読まずに借りて帰る場合でも、[図3]のケースのように、借りて持ち帰る本を選択するため、館内をくまなく歩くという来館者もいて、こうした例の場合には比較的滞在時間が長い。書棚の前で

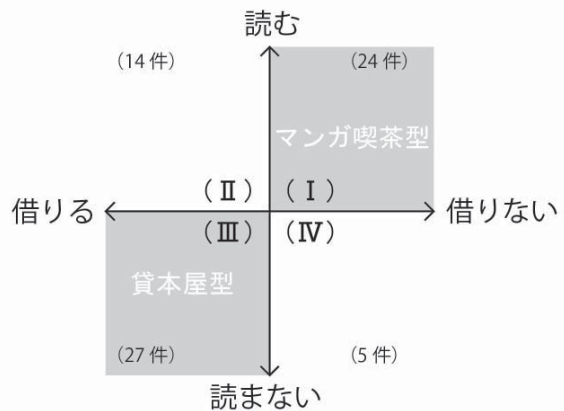


図1 まんが図書館来館者の行動類型

立ち止まってはマンガ本を開き、中身を確認するという作業を繰り返すためである。中身を確認すると言っても、ほとんどの人はパラパラとページをめくるだけで、「読む」という行為とはほど遠く、書棚から取り出したマンガ本をどこかで落ち着いて読むということもほとんどない。[図3]の事例の場合も、館に49分滞在しているのだが、座ることはなかった。こうしたケースは少なくなく、特に30代～40代の女性に多かった。

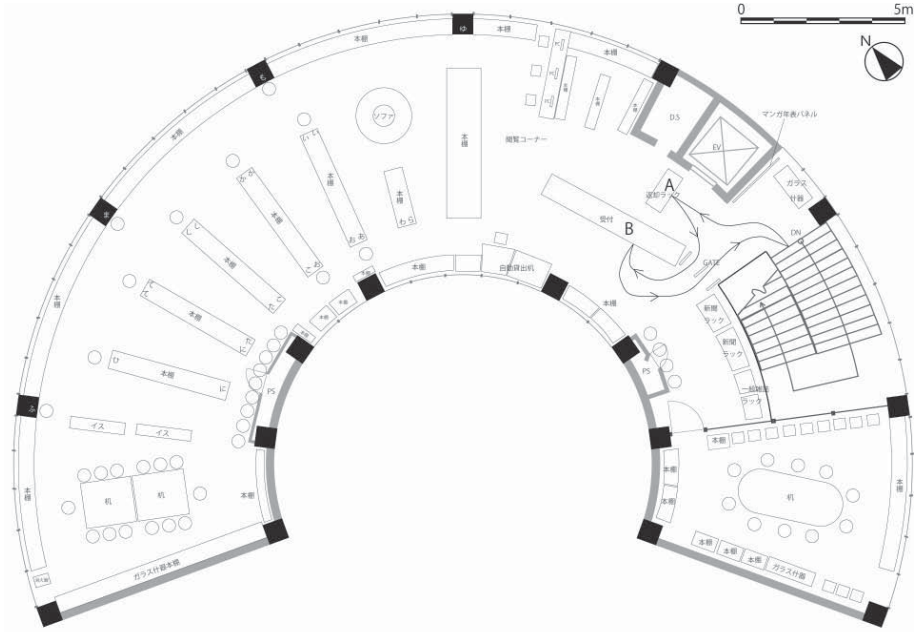
次に多いのが、「(I) 読む・借りない」というパターンで、24件あった。[図4]の事例にみられるように、このパターンでは、図書館内における自分の居場所、定位置が決まっており、その席と書棚を往復しながら、マンガ本を読む傾向がみられる。

「(II) 読む・借りる」、すなわち館内でマンガを読んだ上で借りても帰る、というパターンは、これらに比べて少なかった(14件)。「図5」のケースにみられるように、館内をくまなく歩き、かつ滞在時間も長い(この事例の場合147分)のが特徴である。このケースの来館者は、本の予約システムを利用して借りて帰るマンガ本を確保した上で、さらに館内を歩き回って別の本を選ぶような行動もとっている。そうして集めた本を持って自分の「定位置」にいき、しばらくマンガ本を読みふけた後に、予約した本を借りて帰っていった。

「(IV) 読まない・借りない」というパターンは、当然だがさらに少ない(5件)。特にマンガを読んだり借りたりすることを目的とせず来館しており、来館しても、マンガに興味を持つこともなく行動するような例である。これらの行動をとった来館者は、誰かの付き添いで館を訪れたという人々がほとんどであった。

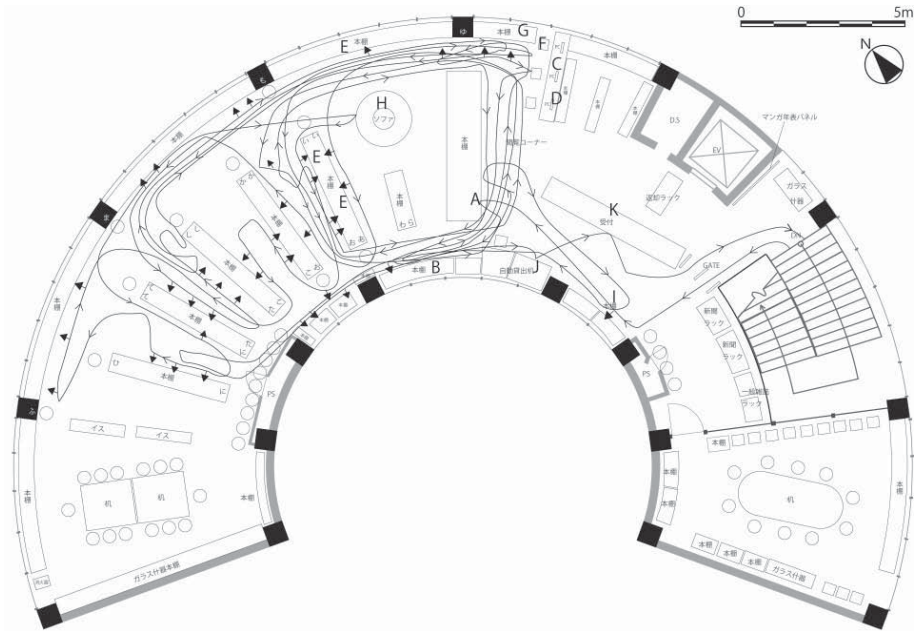
ここでは、「(IV) 読まない・借りる」パターンを「貸本屋型」、「(I) 読む・借りない」パターンを「マンガ喫茶型」を名付けよう。広島市まんが図書館の来館者の場合、この「貸本屋型」と「マンガ喫茶型」が、全データの7割を占めている。





A 返却 B 予約していた2冊を借りる

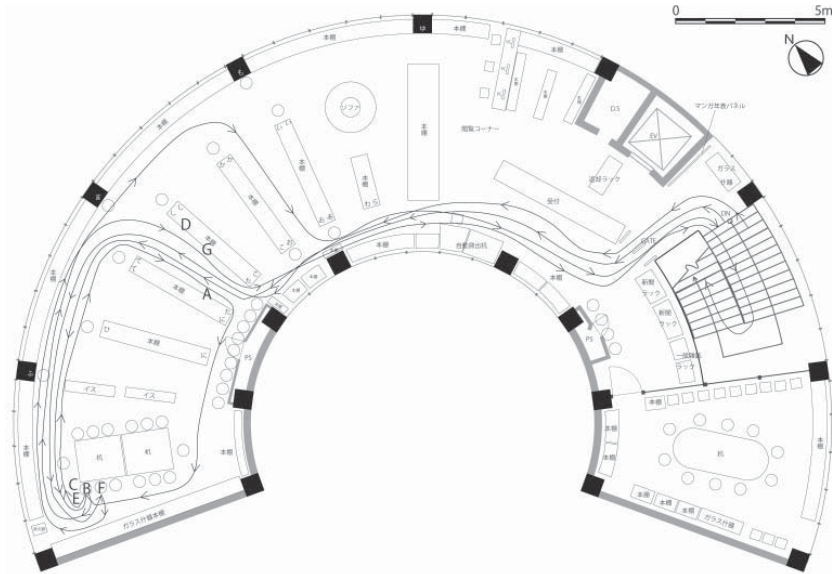
図2 「(IV) 読まない・借りる」パターンの来館者 (1)



A 子と離れる。2分後子が戻り本をかごに入れる。  
再び子離れる。  
B 子と合流  
C 子がPCを操作。3分後離れる  
D 再びPC  
E 色々手に取り聞いてみる

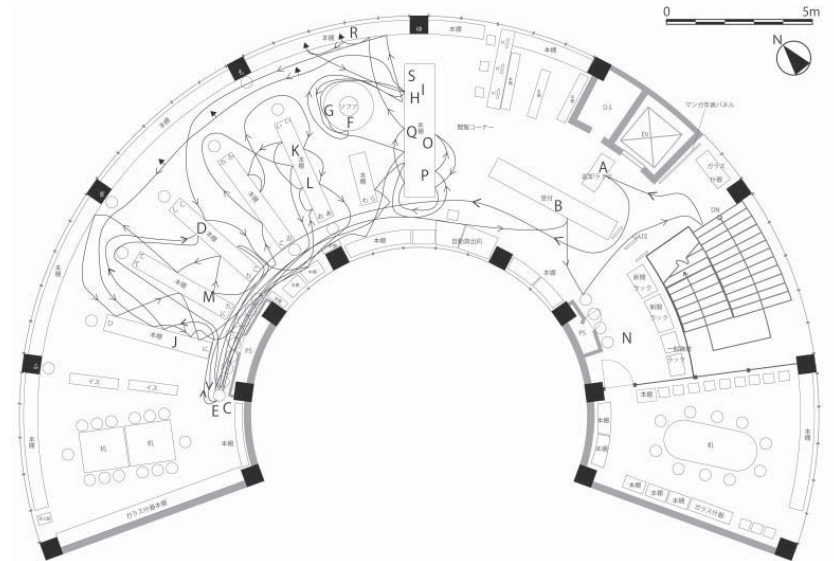
F 子がPCを使う  
G 1人でPC  
H 13:20~22 座ってかごの本を見る  
I 子が大量(10冊以上)の本をかごに入れる  
J 20冊ほど自動貸出し機で借りる  
K 返却していない本が何か聞く

図3 「(IV) 読まない・借りる」パターンの来館者 (2)



- A 'た'の本棚からすぐに本(カムイ伝全集)を3冊取り移動
- B 10:04 座って本を読み始める
- C 13:03 席を立つ
- D 本返却。戻るスペースがなくて困った様子
- 13:05 カムイ伝の続きを2冊ほど取り元いた席へ
- E 13:10 お手洗いのため席を立つ。本は置いて鞆のみ持つ
- F 13:13 再び読み始める
- G 14:57 本を返却。棚に入らないので本の上に乗せる

図4 「(I) 読む・借りない」パターンの来館者



- A 4冊返却
- B 予約本2冊受け取る
- C イスに荷物を置き立ち読み
- D ひゃっほ〜ウニファミリー
- E 本を置く
- F 14:54 座る
- G 16:00 席を立つ
- H 読み終えたマンガ雑誌を戻す。雑誌を手にするが戻し、別の雑誌 Kiss を持つてまた同じ場所へ
- I 16:18 一通り読み終え返却。BLOCK を手に取る
- J 本返却
- K エロイカより愛を込めてを手にする
- L マンガ立ち読み
- M 高橋良子のマンガを手に取り立ち読み
- N 荷物整理
- O マンガ立ち読み
- P KIG 手に取る
- Q 立ち読み
- R 摩天楼のパーティー手に取る
- S BLOCK を手にしてソファーに着く

図5 「(II) 読む・借りる」パターンの来館者

## 5. マンガの読者と図書館

トラッキング調査の結果から、広島まんが図書館は、いかなる読書行為を促進し、どのようなマンガ読者をひきつけているといえるだろうか。

マンガ研究においても、マンガの読み方やそれにまつわる行動から読者をとらえようとするものは多くない。通常、マンガを読む人々はどちらかと言えば一枚岩的にとらえられ、その実像についてはあまり検討されることがなかった。読者が問題にされるときにも、ある特定ジャンルのファンであるという風に一種のステレオタイプとして把握される傾向にある。だが、マンガ図書館のような、様々な年齢層やジャンルのマンガを収蔵する施設において、こうした読者像だけでは、コンテンツの選択を越えた議論を行い、マンガ図書館利用者の実像を描くことが困難になる。

そこで本章では、読書行為に注目してマンガ読者を論じた先行研究を参考に、マンガ図書館を訪れる人々について考えてみることにしよう。

社会学者の石田佐恵子は、マンガの読みと所有の形態という二つの軸を想定し、マンガ読者を分類している [石田 2001] [図 6]。まず、マンガの「読み方」に注目した軸が想定される。特定のマンガについて自分なりの尺度を持ち、マンガについて何らかの意見や視点をもって語ることを好むような「ある世界観を持ってマンガを読む」行為と、その対極に、マンガ作品を情報としてとらえ、次々に読み進めていくような「情報としてマンガを読む」行為を両極に設定したものである。もう一つは、マンガの「消費行動」に関する軸だ。つまり、マンガを購入し、繰り返し読み、書籍を保存して蓄積していくような「記憶・蓄積・収集・所有」することを指向する極と、「廃棄・忘却・所有しない」という極を想定する軸である。もちろん石田は、図のⅠ～Ⅳの分類のどの読者が優位にある、という議論をおこなっているわけではないし、一人の読者の中に、Ⅰ～Ⅳの読書行為が混在していることもあると述べている。

広島市まんが図書館における来館者行動は、「貸本屋型」と「マンガ喫茶型」の行動が中心を占めていた。貸出冊数の多さや、マンガ本の読みを深めてくれる可能性を持っている「展示」に興味を示す人々がほとんどいないことなどを考えると、まんが図書館が、1冊の本を繰り返し読んだり、マンガの背景や関連する作品群、作品関する評論などに関心を持ったりするような行為を来館者に促すことに成功しているとはいえない。来館者の多くは、「世界観を持って読む」よりは「情報としてマンガを読む」方が、また「記憶」していくよりは「忘却」していく要素が強く働いている読者である。

このことから、広島市まんが図書館は、結果的に、来館者に数多くのマンガを消費するような読み方（読書行為）、すなわち石田の類型にあてはめれば、Ⅲの「情報として読む-忘却」

に当てはまるような読書行為を推進し、そうした行為を中心に行うマンガ読者のための施設になっていると考えられるだろう。このような読書行為、読者が中心になるということは、他のⅠ・Ⅱ・Ⅳの読書行為を望む読者にとっては、館が利用しづらいものとなることも意味する。

もちろん、「みんなが読みたいものだけ」を置くのでは、町のレンタルマンガと

差異化が図れないし、「マンガ文化を提示するのが公立の図書館だと思う」という言葉にあらわれているように、館スタッフは現状に満足しているわけではない。

では図書館側は何を必要と考えているのだろうか。一つには、図書館が書籍を廃棄せざるを得ないことへのジレンマから推測できる。まんが図書館では、一般の公立図書館同様に一定期間後、人気のない本は閉架扱いとなり、さらに動きが少ないと確認されれば廃棄される。この廃棄にあたって、マンガ本によっては、スタッフが京都国際マンガミュージアムなどマンガ資料のアーカイブを目的としている施設に声をかけ、資料保存の可能性を探ることもある。つまり、可能であれば「記憶・所有」のベクトルを確保したいと考えているのである。そもそも同館の理念として、「保存」ということも掲げられていた。

また、「世界観を持って読む」ことを合わせて担保したいとも考えているようだ。このことは、彼らが館内奥にある貴重本を収蔵している什器を、「うちの館にとって大事で、資料をみに行く人も時々いる」と位置付け、たとえほかの書棚が不足しても、なくすことができない重要な要素と位置付けていることから読み取れる。

もちろんこうした「体裁」こそが、行政的に「図書館」として扱われるために、また「図書館」というアイデンティティ確保のために（スタッフにとっても）必要とされるという側面もある。

一方、こうした志向とは逆に、むしろ「情報として読む-忘却」というⅢの領域を意識的に拡大させることによって、異なる「図書館」を、もっと言えば従来の「図書館」とは違う文化施設を構想すればいいのではないか、という発想も登場するだろう。

広島市まんが図書館では、トラッキング結果において「読まない・借りない」という行動は少数派であり、このカテゴリーは付き添い目的で館を訪れた人の行動としてのみ観察された。「読まない・借りない」という領域には、もしかしたら、マンガについておしゃべりをしたり、

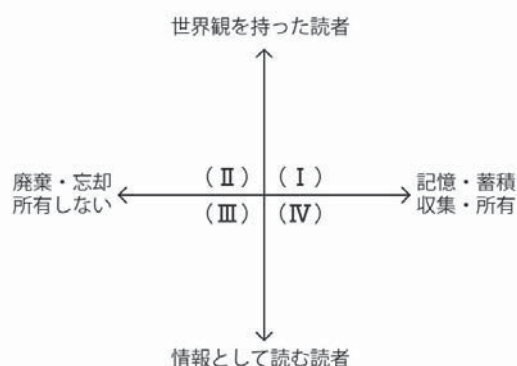


図6 石田佐恵子によるマンガ読者類型  
[石田 2001 : p.169] 図1をもとに作成

マンガに囲まれた場でリラックスしたりするなど、「マンガ体験」を広げるかもしれない行為と考えることも可能である。しかし、同館ではむしろ、私語の禁止や姿勢の悪い子どもを正す行為など、あくまで「図書館」としてのルールを守らせていることから、こうした可能性を閉ざしているのかもしれない。図書館が、広く本との出会いをもたらし、その世界への窓口となる場であると考えれば、こうしたマンガ読書行為の幅を広げるような「あいまいな空間」をメインに考える図書館があってもよいのではないか。

たとえば、和歌山県有田郡有田川町にある、有田川町地域交流センター（ALEC）は、マンガも収蔵する公立の図書館（正確には図書館相当施設）である。ここは、図書館としての機能よりは、本のあるコミュニティスペースを創出することを第一の目的として設立されている。広々とした空間にテーブルとイスが並べられ、食事をしたり、お茶をしたりしながら、来館者同士がおしゃべりを楽しむことができるようになっているのである<sup>7</sup>。

もちろん、こうした「図書館」像が、マンガの読書行為を多様化できるかについては留保が必要である。ALECは多数の来館者数を誇り、人気を集めてはいる。だが、やはり、この施設が推進するのは、マンガを「情報として読む－忘却する」という読書行為である、という点で広島市まんが図書館と変わりがないということもできる<sup>8</sup>。

一方、Iの方向、すなわち「記憶・所有」のベクトルを持ち、「世界観を持って読む」ような方向に舵を切ると、結局は充実したアーカイブやレファレンス機能といった専門的な志向が強くなるため、今度は市民が気軽にかつ日常的にマンガに接するような空間を担保できるのかという問題が生じる。また行政レベルでいえば、そのような専門館は、市レベルでは住民に還元できないという批判が、当然出てくるだろう。

こうしてみると、マンガを「図書館」という組織や制度の中で扱うことは、結果的に、マンガが誘発するいくつかの読書行為をそぎ落とす可能性を常に内包してしまうといえる。マンガが、冊子という形態をとりながらも、図書館が普段扱っている「書籍」という枠に収まりきらないメディアでもあることについて、もう一度考えてみる必要があるだろう。

## おわりに

広島市まんが図書館は、来館者数の多さという観点から成功例として語られることが多く、また、実際に上記のような「読み」を生み出す空間として有効に機能している。物理的空間のキャパシティをはるかに超える来館者がやってきても、自分のまわりにみえない壁のようなプライベート空間をつくって読むというマンガ読書の特性により、奇跡的に破綻を免れている。そのため、現場のスタッフや司書の「悲鳴」が可視化されない状態にもなっている。先のイン

タビューにもあったように、現場には、図書館としてのさまざまなジレンマが存在する。そのジレンマの一端は、みられることのほとんどない「展示」にあらわれているが、これはつきつめれば、マンガ図書館という施設が、いったい何を指すのかという問いにもつながるだろう。

例えば米沢嘉博記念図書館のような専門性を追求した情報センターを目指せば、市民が気軽に来館する空間にはなりにくく、一方で市民が気軽にマンガを消費するような空間を目指せば、それこそマンガ喫茶や貸本屋とどう違うのか、といった批判に発展するかもしれない。双方を兼ね備えた施設があればよいのであろうが、二つのベクトルが共存しうるかどうかは、実は「マンガ図書館」だけの問題ではなく、「図書館」というシステムそのものの在り方や、図書館が担保しうる公共性の問題とも関わっている。特に、市町村レベルの図書館においてマンガを扱う際には、マンガをタダで大量に読みたい市民へのサービスという以外の目的をもって運営することは、難しい。その意味でいえば、公共施設としてのマンガ図書館をどのように構想していくかは、見た目ほど簡単ではない。

「マンガ図書館」の問題はしかし、「図書館」について突き詰めて考えれば解決するものでもない。本稿では、マンガを扱う文化施設のひとつの形としての「マンガ図書館」について考えてきたが、ここで明らかになった問題系はむしろ、マンガを広く扱うマンガ文化施設全般について考える際のヒントを与えるかもしれない。そして逆に、様々な形のマンガ文化施設のあり方を想像し、議論していくことが、翻って、「マンガ図書館」という枠組みの可能性も逆照射することだろう。

## 脚注

- 1 われわれはこれまで、京都国際マンガミュージアムでの調査をもとに「博物館」「図書館」としてのマンガ文化施設の意味を、宝塚市立手塚治虫記念館での調査をもとに「博物館」「記念館」としてのマンガ文化施設の意味について、それぞれ [村田・山中・谷川・伊藤 2010] [山中・伊藤・村田・谷川 2011] と [村田・山中・谷川・伊藤 2012] で論じてきた。
- 2 2010年度における、広島市の図書館全体の全貸出数は 5,422,659 冊、広島市の図書館全体のマンガ本貸出数は 1,183,615 冊である。
- 3 1位は「あさ閲覧室」であるが、ここは、まんが図書館の分室である。他の図書館が区民センターなどとあわさった複合施設であり、副次的、偶発的な来館者が期待できることなどを差し引きすれば、マンガがいかに高いニーズを持っているかがわかるだろう。
- 4 トラッキング調査は、一般的に、被調査者に調査していることがわからないように行われるため、年齢等の属性に関する正確な情報を知ることはできず、調査対象者が何を考えていたのかを明確にデータとして抽出することはできない。ただし、今回は、被調査者に、調査の旨を伝えた上で

トラッキングを行った。

- 5 ハーレクイン (Harlequin) シリーズは、カナダの出版社が発行し、世界 97 カ国・27 言語に翻訳されている女性向け大衆恋愛小説のレーベルだが、近年、日本人が、それらをマンガ化したコミックス版を定期的に発行している。
- 6 そのほか、検索機を利用して目的のマンガを探すというケースも 13 件あった。また、来館と同時に、借りていたマンガ本を返却するというケースは 30 件と、約半数であった。このことは、少なくとも半数以上の人がりピーターである可能性が高いことを示している。どのマンガのどの巻が既読かまとめた独自のノートを作って記録していた人もいた。ノートを片手に、目当てのマンガ本が借りられるかどうかをチェックする作業を行っており、この被調査者も、館を網羅的・効率的に利用するヘビーユーザーであろう。
- 7 ALEC を構想し、つくったと言っていい有田川町社会教育課課長で ALEC センター長の三角治氏は、同センターを構想するにあたって、広島市まんが図書館に視察に行っている。そこで、マンガの持つ吸引力に驚く一方で、「図書館」という枠組みの限界も感じたと言っている。(伊藤・村田・山中・谷川による 2012 年 1 月 15 日・16 日における三角氏へのインタビュー調査より)
- 8 もっとも、こう言えるのはあくまで、ALEC という施設を [図 1] の中に押し込めようとした場合である。そもそも ALEC は、「読む／読まない」「借りる／借りない」という、図書館において自明の前提であった軸とは別のベクトルを模索してできた施設であることを思い出せば、「マンガ図書館」ではなく、広く「マンガ文化施設」について考える際には、議論のヒントを与えてくれるかもしれない。

## 参考文献

- 石田佐恵子「誰のためのマンガ社会学——マンガ読書論再考」『マンガの社会学』世界思想社、2001
- 伊藤遊「「はだしのゲン」の民俗誌——学校をめぐるマンガ体験の諸相」吉村和真・福間良明(編著)『「はだしのゲン」がいた風景——マンガ・戦争・記憶』梓出版社、2006
- 片山久仁子「広島市まんが図書館あさ閲覧室オープン——公立初の漫画専門図書館の運営から」『みんなの図書館』269号、図書館問題研究会(編)、教育史料出版会、1999
- 久留井洋士「「広島市まんが図書館」の誕生——漫画文化を新しい市民文化に」『図書館雑誌』269号、1998
- 小林郁治「マンガと図書館——まんが図書館の運営から教えられたこと」『現代の図書館』日本図書館協会 現代の図書館編集委員会(編) vol.47, no.4 (192号)、図書館社団法人日本図書館協会、2009
- 図書館問題研究会(編)『みんなの図書館』269号〈特集 図書館でマンガを提供するには〉教育史料出版会、1999

日本図書館協会 現代の図書館編集委員会（編）『現代の図書館』2009年12月（192）号（vol.47, no.4）

〈特集 図書館におけるまंगाの行方〉図書館社団法人日本図書館協会、2009

村田麻里子、山中千恵、谷川竜一、伊藤遊「京都国際マンガミュージアムにおける来館者調査——ポピュラー文化ミュージアムに関する基礎研究」『京都精華大学紀要』第37号、2010

村田麻里子、山中千恵、谷川竜一、伊藤遊「宝塚市立手塚治虫記念館における来館者調査——地域活性化のためのマンガ関連文化施設の実態と是非をめぐって」『関西大学社会学部紀要』第43巻2号、2012

山中千恵、伊藤遊、村田麻里子、谷川竜一「人はマンガミュージアムで何をしているのか——マンガ文化施設における来館者行動と〈マンガ環境〉をめぐって」『マンガ研究』17号、日本マンガ学会、2011

『広島市の図書館（要覧）2011年度（平成23年度）』広島市文化財団中央図書館、2011

本成果は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22年度～26年度）の助成により行われている関西大学社会的信頼システム創生プロジェクトの一部であり、同時に広島市まんが図書館および有田川町地域交流センター（ALEC）の関係各位の温かいご支援と、調査を手伝って下さった大学生・院生の諸氏の尽力による。